

2018 年度 立命館附属校 新任・専任教員対象 赴任時研修

附属校教育研究・研修センター

3月30日（金）朱雀キャンパスにおいて、附属校教育研究・研修センター主催「2018年度附属校新任・専任教員対象 赴任時研修」を実施した。

参加者は、新採用21名（立命館中高3名、立命館小学校2名、立命館宇治中高7名、立命館慶祥中高3名、立命館守山中高6名）中、20名であった。

研修会は、友草司センター長の開会の挨拶に始まり、岩崎成寿一貫教育部長による「立命館附属校教育の現状と課題」、立命館守山中学校高等学校文田明良副校長による「立命館の歴史～過去・現在・未来～」の講義をお聞きした。講義の概要は以下の通りである。

岩崎 成寿 一貫教育部長「立命館附属校教育の現状と課題」

当講義は、参加者のアイスブレイクを企図したワークショップより始まった。当該活動を通じ、参加者が抱く立命館像を顕在化および共有したのち、部長による立命館に対する社会的評価についての講話を頂いた。内容は大きく7点から構成され、①附属校の学校づくり、各附属校、個性化の状況、②最近の主な附属校生の活躍、③R12のいま「大学の核となる人材育成」への道、④国際教育を最大限活用して育つ子どもたち～トップ・グローバル・スクールズ構想、⑤附属校版「学びの立命館モデル」の実現～自立した学習者の育成、⑥高大連携・高大接続～新たな高大接続と一貫教育モデル、⑦立命館大学進学後の附属高出身学生の状況、でした。

近年の附属校における目覚ましい教育実績があらゆる面で傑出している一方で、優れた生徒をどのように一貫教育で育てていくのかについてのさらなる検討・新たな教育の在り方の発信が今後の課題として挙げられた。

（記録 立命館中高 福田成穂）

文田 明良 立命館守山中学校・高等学校副校長「立命館の歴史～過去・現在・未来～」

立命館と長く歩んでこられた文田副校長より、立命館が大切にしていることや、建学の精神、気概などをご教授いただいた。

まず初めに、末川博先生の言葉「理想は高く、姿勢は低く」の意味について。これは、唯一無二の存在で何物にも代えがたい存在であること、全体の中の一人でとるに足りないものであるというどちらの意味ももっている。次に「立命」の文字の意味について。これは孟子の尽心章句より、「目先のことに惑わされず、生きている限り常に学び、与えられた使命に一生懸命努める、それが命を立つということ」、ここから立命の名前をつけたと教わった。また、建学の精神である「自由と清新」には、自由な学風の中で自由に学び合える場の保障と、新たなものに挑戦し時代に貢献するという意味を持つ。さらに、今日の立命館に多くの影響を与えた末川先生の話聞いた。そこでは、「未来を信じ 未来に生きる」の意味や、今も残る全学協議会や土曜講座には末川先生の民主主義、社会に開かれた学校という精神が息づいていることを知った。

最後に立命館の気概について伺った。①門戸の拡大②学問の自由を尊重③世界の中の日本という視点④教育の質は優れた教師陣から、この4つの中でも特に④が大切である。教師の教育力こそが立命館の教育の要であることを伝えられ、講義を締めくくられた。

（記録 立命館中高 松本一也）